



地人館  
E-books 16

デモ版 pdf

親鸞を総合的に理解する  
現代に生きる「他力」の思想

# 親鸞入門

田中治郎 著



【表紙】

親鸞聖人像（熊皮御影）<sup>くまがわのみえい</sup>部分

鎌倉時代・重文

奈良国立博物館蔵

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

## はじめに

仏教の開祖である釈迦しゃかは、この世を「一切皆苦いっさいがいく」と喝破した。思いどおりにならないことを、サンスクリット語で「ドウツカ」といい、「苦」と訳される。苦とは、思いどおりにならないことなのだ。

人間とは、思いどおりにならない精神構造を有している存在である。なぜならば、人間の欲望は深く、ほしいものを手に入れたとしても、「もつと、もつと」とその欲望が再生産されて飽くことがないからだ。私たちは、思いどおりにならないことを求める精神構造を保持しているといえる。したがって、本質的に人間は苦なる存在なのである。

格差社会といわれ、多くの人が苦しんでいる現代というゆがんだ時代において、その苦は顕著に表れているような気がする。その意味で、現代こそ末法の世といえるのかもしれない。私たちは、この苦を克服すべくさまざまな努力を重ねてきた。しかし、砂をかむようなむなしさだけを胸に置く人も少なくないのではないだろうか。

このような努力を「自力」と呼ぶとすれば、今の時代に光を放つのは、「他力」の思想なのかもしれない。「他力」とは、人間の力（自力）を越えた仏の力とでも言っておこう。

鎌倉時代に活躍した親鸞聖人（以下、親鸞と表記）は、徹底して自力によるはからいを否定した。人間にできることなどにほどのものもない。逆に、こざかしい自力の意識が差別を生み、傲慢の心を生んで自己を閉塞させる。自分の無知と愚かさを知り、阿弥陀仏の慈悲にすべてをあずけよと、絶対他力を説いた。

そしてそつと阿弥陀仏に手を合わせたとき、その合掌は自分がしているのではなく、阿弥陀仏がさせてくれているのであり、そのときすでに私たちは救い取られているという。

この苦の現実を生きる現代人にとって、もっとも根源的で本質的な問いかけをしているのが親鸞であろう。本書では、その親鸞の生涯と教えを中心に、できるだけわかりやすく解説しつつ、読者とともにその理解を深めていきたいと思っている。根気よくご同伴いただければ幸いである。

田中治郎

【親鸞入門】もくじ

はじめに

第一章 現代を読み解く親鸞の教え

末法の世としての現代

世界に蔓延するエゴイズム

欺瞞の時代を生きる

弟子の本音に添う親鸞

競争に苦しむ現代人

往相と還相

自我と無我

悟りに至るプロセス

行と証

親鸞とV・E・フランクフル

第二章 苦難と激動の日々 親鸞の前半生

誕生

出生と系譜

親鸞を育てた人と環境

比叡山延暦寺

青春の懊悩

出家からの出家

如意輪観音の導き

六角堂参籠

法然との出会い

法然房源空

子弟の交流

隆盛と弾圧

承元の法難

第三章 静かなる思索の日々 親鸞の後半生

越後での日々

非僧非俗

教信沙弥への憧憬

恵信尼と子どもたち

流罪赦免

越後の衆生と京の衆生

関東へ

『教行信証』の執筆

独りの思想家

山伏弁円

帰京

清貧の日々

息子善鸞の義絶

『歎異抄』

還浄

第四章 親鸞の思想

阿弥陀仏

聖道門と浄土門

四十八願

極楽浄土

悪人正機

信心為本

非僧非俗

独りの親鸞——共同体の宗教を超える

往相回向と還相回向

無量寿と無量光

五逆と誹謗正法

自然法爾

浄土三部経

愚禿鈔

末灯鈔

三帖和讃

正信念仏偈



第五章 親鸞に連なる七高僧

龍樹

天親

曇鸞

道綽

善導

源信

源空

おわりに

# 第一章 現代を読み解く親鸞の教え

## 末法の世としての現代

私たちは今、世界的な規模でコロナウイルスに苦しめられているが、それはそれとして客観的に歴史の流れを観察すれば、現代は人類史上もつとも文明が高度化し、富み栄えている時代であるのは間違いない。私たち日本人を含め、先進国に生きる人々はその恩恵を享受している。

例えば食を考えても、今や生命を維持するための食ではなく、グルメと称して、味覚の饗宴の具となっている。

交通の便を見ても、かつては八時間、十時間を要して移動していた距離が、今や新幹線で二時間足らずの移動時間となった。お金を出せば宇宙にさえも行ける時代である。少なくとも、私たち日本人はかつてない豪華な時代を生きている。

しかし、日本人の百人中九十九人は、なにかが変だと感じていることだろう。連日コロナウイ

ルスの情報とともに、悲惨な殺生や卑劣な事件が報道されている。人に対する思いやりや共感が私たちから遠のき、殺伐とした空気が時代を覆っていると思えない。

政治不信も膨らむ。未曾有の超高齢社会を迎え、これからのお年寄りの暮らしはどうなるのだろうか。青写真が見えない。社会的には格差が拡大し、負け組と呼ばれる人たちが生きる意欲をそがれている感も否めない。

自然環境も劣悪化し、地球温暖化はさまざまところで生態系全体に悪影響を及ぼしている。

世の中には、物質的にかつてない繁栄を誇っている反面、私たち個人は精神の秩序を失い、心が路頭に迷っているということなのだろう。「世も末だ」という言葉が聞こえてくるような気がする。

現代が「世も末」の時代だとすれば、そこが親鸞（一一七三～一二六四）の時代と重なってくる。「世も末」のことを「末世」といい、「末法」とも呼ぶ。親鸞は、鎌倉時代という末法の時代に、真の自己とはなにかをとことん追求し、苦悩にもだえる人間がどうすれば救えるのかを徹底して突きつめようとした思想家である。

仏教には、仏が入滅したあとの世界を三つの時代に分ける「三時思想」という考え方があり、「正法」「像法」「末法」の三時である。

ここでいう仏とは、今からおよそ二千五百年前にインドに現れた仏教の開祖、シャークヤ・ムニ（サンスクリット語で「シャークヤ族の聖者」の意味）のことで、中国ではこの言葉を「釈迦牟尼」と音写し、敬称をつけて「釈迦牟尼世尊」と称した。これが短縮されて、仏教の開祖であ

る仏は「釈迦」「釈尊」「世尊」などと呼ばれるようになったのである。本書では、「釈尊」と呼ぶことにしよう。

さて、三時とは、釈尊が亡くなってからの時期を、前記の正・像・末という三期に分ける考え方である。

正法時は仏の教えと修行と悟りの三つがそろっているが、次の像法時は教えと行だけが残って悟るものがないくなり、さらに末法時になると、教えだけが残って行も悟りもなくなるといふ。この期間が一万年続き、次には教えも滅びる「法滅」の時代が来るとされる。末法以後を「末世」ともいい、混乱と衰退の恐るべき時代となる。

その期間については、正法は釈尊入滅後五百年、像法は千年とする説と、正法が千年、像法が五百年とする説、正法、像法とも千年とする説がある。

わが国では奈良時代ころから三時思想が広まり出したが、平安時代には正法千年、像法千年説が一般化した。

中国・唐代の法琳ほうりんが著した『破邪論』の「周書異紀しゅうしよいき」では、釈尊の入滅を紀元前九四九年としているので、末法に入る年は一〇五二年、すなわち平安時代の永承七年ということになる。

このころは、それを裏づけるように戦乱や天変地異がこの国を見舞い、人心は混乱し、疲弊を極めていった。

その動乱は鎌倉時代まで持ち越される。そして、この閉塞した時代に、まるで清流の小川が流

れ込むかのごとくに、ほうねん法然、えいさい親鸞、えいさい栄西、どうげん道元、にちれん日蓮、いっぺん一遍などの天才たちが輩出した。

それぞれは、じようどしゅうじようどしんしゅう浄土宗、じようどしゅうじようどしんしゅう浄土真宗（しんしゅう真宗）、りんざいしゅう臨済宗、そうどうしゅう曹洞宗、にちれんしゅう日蓮宗、じしゅう時宗という新宗派を立てて人民救済に向かったのである。

心の末法ともいえるような現代に、私たちを救ってくれる存在が果たして現れるのだろうか。

世界に蔓延するエゴイズム

いつの世も、人間はエゴにまみれた存在だと思ふ。

今、地球は異常気象という恐怖におびえている。その原因の一つは、地球温暖化だといわれている。地球温暖化は、人類のエゴが積み重なって生み出してきた災厄さいやくといえるだろう。十八世紀の産業革命以来、人類は近代化路線を追求し、化石燃料を大量消費して森林を伐採しつづけた。その結果として温室効果ガスが増大し、地球温暖化を招いているのだ。貴重な森林や動植物を絶滅の危機に追いやっている。まさに、人間中心主義という人類のエゴイズムが生み出している地球規模の危機である。

この地球温暖化を、「フエイク」だと言って切り捨ててしまった人がいる。トランプ前アメリカ大統領だ。この人は、「アメリカファースト」という実にエゴイステイックな標語を唱え、アメリカのみならず世界を分断させた。その後、世界にはよく似た独裁者が出てきて大手を振るう

ようになり、多くの人民・国民が苦しんでいる。政治のエゴイズムが大量の苦しむ人々を生み出しているのだ。

外国だけの話ではない。わが国でも、一内閣が勝手に憲法の解釈を変えてしまったり、懇意にしている人に国有地を大盤振る舞いしたり、挙げ句の果てに、それを隠蔽するために公文書を改ざんしてしまったりするという自分勝手な非法がまかり通っている。これもエゴだ。

私たちのもとと身近を見れば、オレオレ詐欺で親や祖父母のような人をだましたり、相続できようない縁者がいがみ合ったりして、自分さえよければそれでいいというような風潮がはびこっている。

他人ごとではない。私自身、他人を案ずるよりもいち早く新型コロナワクチンの接種におもむいている。心の裏側には、まず自分は感染したくないという心理が働いているのだろう。これもまたエゴイズムだと思う。

ところが、一方にはいいわけを考える自分がある。「ワクチンを打つのは他人にうつさないためであり、集団免疫の獲得に一役買っているのだ」と。公文書の改ざんに関与する人にも、そのほうが最終的には丸く収まり、国のためになるという考えがあったり、多くの難民を排除する国家指導者には、国内の混乱を引き起こさないための処置だという理屈があるに違いない。要するに、「自分はエゴイストなどではなく、みんなのことを考える正義の側の人間だ」と思っている。自分を含めて、残念ながらそれが常ではないだろうか。

## 欺瞞の時代を生きる

考えてみれば、正義とは相対的なものであり、使い勝手のよいものであり、恐いものでもある。親鸞は、この「正義」という代物とも真正面から向き合った。正義をかざせる強い人よりも、正邪もわからずに生活に追われる庶民の側にこそ阿弥陀仏の慈悲は及ぶといい、正義という日向の陰に立たざるを得ない人々を擁護した。

善人なほもて往生をとぐ、いわんや悪人をや（『歎異抄』三）

という有名な言葉に表される「悪人正機説」がそれである。「悪人」の言葉には、弱者、貧者、被支配者等の立場が託されているのだと思う。

だから、親鸞は内省的になる。そして、「人間のエゴ」とも究極まで対峙した。しかも他人のエゴを問いつめたのではなく、自分自身のエゴを見つめ、徹底的に内省することによってその本質を見極めた人だったと思う。親鸞の内省の言葉を示そう。

悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ること

喜ばず。よろこ  
（『教行信証』）きょうぎょうしんしんしょう

「愚禿鸞」とは、「愚かな僧侶であるわたくし親鸞」というほどの意味だ。「禿」とは剃髪者を指し、僧侶と解される。「鸞」は親鸞のこと。ただし、愚禿鸞の呼称は、法然の弟子となつてから法難に巻き込まれて越後の国府に流罪となり、僧籍を剥奪されたときに、親鸞は「非僧非俗」という独特のスタンスを自らに課し、このころから使うようになったといわれている。したがつて、「悲しきかな、愚禿鸞」とは、「哀しいことだなあ」と、非僧非俗の身である自分に話しかけているのである。

「愛欲」の「愛」とは、仏教ではもつとも根源的な欲望を表す。灼熱の砂漠でのどがからからに渴き、水を求めるような衝動のことだという。盲目的な衝動、激しい欲望を指す。そういう欲を愛欲と呼ぶ。「愛欲の広海に沈没し」、つまり、自分は、そのような愛欲という広大な海に、全身どつぷりと沈没するようになっていくという。欲望を退け、貧に甘んじる聖人のような存在ではあり得ない、と言っているのである。

「名利の太山に迷惑して」の「名利」とは、名誉や利益のこと。名利の大きな山の中で、それらをはねつけることもできずに迷い、惑っているのがわたくしである、と言っているのだ。

ほんとうの人間とは、きれいごととは縁遠い存在だ。この言葉は、きれいごとを平気でいえることこそがエゴであり、根源的な欲望なのではないかという反語のようにも聞こえる。



「定聚」<sup>じょうじゆ</sup>とは「正定聚」<sup>しょうじょうじゆ</sup>のことで、悟りが決定している人、またはその位を指す。浄土に生まれることを約束された人のことだ。浄土に生まれることを約束されても、自分は喜べないという。それは生への執着が断ち切れないからだろう。

### 弟子の本音に添う親鸞

親鸞の弟子である唯円<sup>ゆいえん</sup>が、師の言葉をまとめたといわれる『歎異抄』<sup>たんにしやう</sup>に、次のような話がある。  
ある日、唯円が親鸞に尋ねた。

「私は念仏を称<sup>とな</sup>えても喜びの気持ちがわかないし、浄土へ行きたいという心も起こらないのですが、いったいどうしたことでしょう」

すると親鸞はこう答えた。

「じつは私も同じなのだ。よく考えてみると、念仏を称<sup>とな</sup>えても喜びの気持ちわいてこないのは、私たちが凡夫である証拠だ。阿弥陀さまは煩惱にまみれた凡夫を救うとお誓いになったのだから、ますます阿弥陀さまが私たちを浄土に往生させてくれると思うべきなのではないだろうか。浄土へ往きたいという心が起こらないのも、この苦悩のふるさとが捨てがたく、まだ生まれたこともない安らぎの浄土を恋しく思えないのも煩惱の所作ではないだろうか。

だからこそ、阿弥陀さまは私たちを浄土へ救い取ってくださいるに違いない。かえって念仏する

と喜びがわき、浄土へ行きたいという心が起るようだったら、阿弥陀さまは『煩惱がないのだからな』と不審に思われるのではないだろうか」

このとき、もし親鸞が唯円に、「念仏を称しても喜びの気持ちが変わってこないのは、おまえの信心が浅いからだ」と答えていたとしたら、唯円に自力を求めていることになり、阿弥陀仏への帰依の心をそぐことになる。また、このような本音で本質に迫るところにこそ親鸞の真骨頂があり、このエピソードは親鸞という人をよく表しているように思える。

先の「定聚の数に入ることを喜ばず」とは、生に執着している自分は、浄土に生まれることを約束されても、まだ死にたいとは思えない凡夫であるという表明である。通していえばこうなるだろう。

「哀しいことだ。この非僧非俗の親鸞は、欲望という大きな海に身を沈め、名誉や利益でできた大きな山の中で迷い惑っている。生に執着して、浄土へ行きたいとも思えずにいる」

鎌倉時代も現代も、欺瞞の時代であることに変わりはないと思える。自分の利益のために権謀術数を弄し、自己美化をはかり、エゴを押し通そうとする。

親鸞はそういう時代に生き、自己欺誦と戦いつづけた人であった。私たちもまた、この困難な時代に真の自己を生き抜けるだろうか。

競争に苦しむ現代人

仏教が一貫して説いているのは、人間がエゴ（欲）にまみれた存在であり、満たせるはずもない欲望と執着を再生産していくから、苦しみを背負うほかはないということだ。

潤沢な物質に恵まれた時代を生きる私たちが、不安と苦しみから逃れることはできずにいる。教育の現場では、今や大学全入時代といわれているにもかかわらず、受験戦争は解消の兆しを見せない。

大学側からいえば、経営サバイバルに勝ち残るためには学生数を増加させなければならない。有名校となつて優秀な学生を確保することがその保証となるから、競争をあおり立てることになる。

受験生の側からいえば、少しでも名の通つた大学に進み、自分の経歴をよりよいものにしておきたいと考える。それは社会に出るときの不可欠なパスポートだからだ。

大学側も受験生側も、自己の保身のために競争を生み出して勝ち抜こうとしているし、自分のステータスを高めて保持しようとしている。

それは、欲と執着以外のなものでもない。それらが受験地獄という苦しみを生み出し、学校現場に格差をつくり、いじめや校内暴力の温床を育んでる。

社会に目を移せば、こちらはより以上の競争が待っている。かつての護送船団方式といわれる緩やかな保護主義はなくなり、グローバルイズムの名のもとに容赦のない競争社会となった。

勝ち組といわれる人たちにしても、より大きな企業とのさらなる戦いを強いられ、あるいは組織の中でもさらに勝ち負けの競争に巻き込まれる。

サラリーマンたちの苦しみもまた、企業や社会の組織的な金銭欲と名誉欲によつてもたらされているとしかいえない。

超高齢社会を生きなければならぬ老人たちの不安や苦しみは、今さら改めていうまでもないだろう。

厚生年金だけで食べていける人は多くはない。ましてや、国民年金は月六万円程度だということやつて生活していけばよいのだろうか。

それにもかかわらず、高齢者の就業機会はそれほど多くはない。就職するには大きな困難が伴う。

老いの先には病が待っている。さらに、少子化、核家族が高齢者に孤独という重荷を背負わせる。高齢者は、まさに生・老・病・死という四苦を生きることを強要されてる。

## 往相と還相

鎌倉時代も、支配者・権力者は自己の覇権への欲望と執着に突き動かされ、人々を動乱に巻き込んだ。併せて天変地異に襲われ、庶民は血の涙を流しつづけた。死体は累々と道を埋めたという。

人間とは、いつの世も煩惱に翻弄される愚かな存在である。そして、泣くのはいつも庶民である。親鸞は、これらの人々を救うために、坐禅や荒行、加持祈祷などの自力じりきの行によったところで、その救いは相対的なものに過ぎず、現世的な制約を受けて中途半端なものにならざるを得ないと考えた。

であるならば、人はひとたび浄土を選び取って仏となり、そこから再び現世に帰ってきて仏の慈悲と智慧で衆生に絶対的な救済を施すべきだと思いついた。

ひとたび浄土へ行くことを「往相おうそう」といい、再び現世に戻ることを「還相げんそう」という。あまりにも悲惨な現実を目にして、絞り出すようにして生まれた究極の思想だと思われる。

慈悲じひに聖道しょうどう・浄土じょうどのかはりめあり。聖道しょうどうの慈悲じひといふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土じょうどの慈悲じひといふは、念仏ねんぶつして、いそぎ仏ぶつに成りて、大慈大悲だいじだいひ心をもつて、おもふがごとく衆生しゅじょうを利益りやくするをいふべきなり。今生こんじょうに、いかにいとほし不便ふびんとおもふとも、存知ぞんじのごとくたすけがたければ、この慈悲じひ始終じしゅうなし。しかれば、念仏ねんぶつ申すのみぞ、すゑとほりたる大慈大悲だいじだいひ心にて候まうふべきと云々うんぬん。（『歎異抄』四）

自力とは、自分で修行をして悟りを開くことである。それはある意味で、自我の領域に属するものだ。努力を重ね、エゴを昇華・超克することによって真理を悟ろうとするのである。

親鸞は、自力の道を「聖道門」と呼び、聖道門の慈悲はあらゆるものに同情し、助け育てようとするが、助けきることにはできないと言っている。

一方、浄土の慈悲とは、念仏を称えて仏となり、大慈大悲心をもって思うがままに衆生を助け、利益を与えることだという。

この現実の中でどんなに人々をいとおしみ、不憫と思っても、思いどおりに助けることはできないのだから、聖道門の慈悲には限界がある。つまり、念仏を称えることだけが完全な大慈悲心に直結するというのが親鸞の主張である。

思想的には、極みまで達していると思われる。親鸞は、自力の限界と他力念仏の存在意義を、十分に説明している。親鸞入滅以後、人々は完全な大慈悲心求めてその教えに走ることになる。そこには、親鸞のすさまじいまでの自我との戦いがあったに違いない。

仏教では、「諸法無我」を説く。あらゆる存在はいろいろなものとの縁によって仮に成り立っているであり、永遠不変の自我や実体などというものはあり得ないという意味である。これが大乘仏教に至って「空」の思想と結びつく。

しかし、今からおよそ二五〇〇年前の釈尊の時代には、「空」は所有欲や自己顕示欲を戒める

意味合いの強い教えだったという。自我の抑制を説いたのだ。

そう説いた釈尊自身、自らの自我を砕きつぶすためにすさまじい苦行を自己に課した。釈尊は六年間の苦行を積んだが、その無意味さを自覚して苦行を捨て、ナイランジャーナ河（尼連禪河）の清流に身を清めて「中道」を悟ったといわれる。中道とは、快樂という極端によらず、苦行という極端にもよらない悟りへの道である。

では、ほんとうに苦行は釈尊にとって無意味だったのか。

前駒澤大学総長、故・奈良康明氏は、釈尊にとって、苦行は自我をつぶすための欠かすことのできない修行だったと述べて、次のような経典の一句を紹介しておられる。

私は墓地に屍の骨を寢床として寝んだ。牛飼いの少年たちが私に唾きし、小便をかけ、ゴミを体にまき散らし、両耳の間に木片を突っ込んだ。しかし、私は怒ることがなかった。私の「心の平静」（「捨」）に住する行はこのようなものだった。

墓場で修行をしていて、釈尊はおそらく坐禅を組んで瞑想にふけていたのであろう。そのとき、牛飼いの少年たちが来てその姿を珍しがり、「おい、死んでいるんじゃないか」「いや、生きていそうだ」などと言いながら小便をかけたリゴミをまき散らし、果ては耳に木片を突っ込んだというのだ。

しかし、釈尊は怒らず、黙って座りつづけた。その「捨」の行は、自我を捨てる行だったとい  
うのである。このような苦行があつて、はじめて「諸法無我」のような思想が血肉化されたので  
あろう。

親鸞もまた、自らの自我を砕きつぶすため、血の出るような修行を行ったのではないか。あら  
ゆる自力の行を捨てて阿弥陀仏にすべてを任せきる地平に行き着くためには、それ相応の自己超  
克の試行があつたのではないかと思うのである。

例えば、親鸞は二十年にもわたつて修行を積んできた比叡山ひえいざんを捨て、京都の六角堂さんかくどうに参籠する。  
いわば出家からの出家を果たすのだが、そこには否が応でも二十年に及ぶ自己否定が含まれてい  
る。

また、執着から抜けきれない自分や性の悩みを抱え、親鸞はそのような問題を正面に据えて考  
え抜いた。その思考こそ自らの自我との戦いそのものであつただろう。

流刑による強制還俗げんぞく、恵信尼えしんにとの結婚、常陸ひたちでの読経どきょうの夢……等々（後述）に、その痕跡を読  
みとることができるのではないかと思う。

悟りに至るプロセス

阿弥陀仏に絶対帰依してすべてをゆだねることは、ある意味では自己を捨てることである。少



なくとも、「知」を捨てることにはなる。親鸞の師である法然は、『一枚起請文』の中で、たとえどんな学者であれ、念仏を信じようとする人は、文字も知らない愚かな人、無知な人々と同じになり、知者ぶった振る舞いをせず、ただひたすら念仏すべきだと言っている。つまり、知を捨てろといっているのだ。

この境地に至るためには、それなりのプロセスが必要となるだろう。仏教各宗派の開祖となつた平安・鎌倉の天才たちも、それぞれのプロセスを通つてそれぞれの思想の到達点に行き着いた。そして、それぞれの衆生救済のあり方を追求した。

日本仏教の特徴は、「選択」にある。八万四千の法門といわれる教えの中から、各宗祖は一事を選んで思想化し、衆生救済に結びつけた。

平安時代に活躍した最澄だけが例外に見える。唐（中国）に渡つて仏教を学び、円（天台教学）、密（密教）、禪、戒という総合仏教を日本にもたらしたからだ。しかし、最澄にしても、ほんとうは『法華経』を中心とする天台教学を選んだつもりだったのだろう。結果的に彼の学んできた知識は援用され、比叡山に総合仏教大学である延暦寺ができる。そして、そこから鎌倉仏教を生み出す俊英たちを送り出すことになる。

最澄と同じ遣唐使船団で唐に渡つた空海は、密教の一事を選択して日本に伝えた。その儀礼・儀式は朝廷に受け入れられ、密教の豊饒な法具や絵画、彫刻などは平安文化の華を咲かせた。

平安時代に生まれ、鎌倉時代に活躍した法然は、念仏という一事を選択した。「南無阿弥陀仏」

と称えれば極楽往生できると説き、その簡易な教えは易行道と呼ばれて燎原の火のごとくに全国へ広まった。

その弟子であった親鸞も、念仏の一事を選択したことは言うを待たない。法然の孫弟子にあたる一遍も、同じく念仏を選択した。

栄西と、一時はその門をたたいたことのある道元は、いずれも宋（中国）に渡つて禅を選んだ。禅は武家に受け入れられ、室町以降の日本文化を支えることになる。

日蓮は、『妙法蓮華經（法華經）』を唯一絶対の教えとして選んだ。「南無妙法蓮華經」（法華經に帰依します）と唱えれば救われると説き、時の幕府を諫言して宗教改革を訴えた。

## 行と証

こうして彼らはそれぞれ一宗派を形成し、日本の歴史を描いていくことになるのだが、彼らの教えを「行（修行）」と「証（悟り）」という点で見るとき、空海と道元、親鸞の三名の独自性が浮かび上がってくる。

仏教では、釈尊のとき以来、行を因とし、証を果とした。修行をすることによつて悟りを開いてきたのである。釈尊のころの仏教を原始仏教というが、原始仏教においては出家者が八正道という修行を自らに課し、悟りを求めた。のちに大乘仏教の時代になると、菩薩行という在家者

の修行が強調されるが、これとても修行があつて悟りがあるという構図に変わりはなかった。

ところが、日本仏教に至つてこの「行↓証」という関係を変える祖師が登場する。

まず、空海は「即身成佛そくしんじょうぶつ」を説き、「行⇄証」であるとしてコペルニクス的（革命的）転回を示した。この身このままで仏になれるということが革命的だったのである。それならこの身が救われる。

道元は、悟りを開くために坐禅をするのではなく、坐禅をする姿が悟りそのものなのだとこれを「修証しゆしやう一等」といい、ただひたすら坐禅する「只管打坐しかんたざ」を勧めた。これも「行⇄証」という革命的な考え方である。しかし、いずれも修行者が悟りを得る道でしかあり得なかつた。

親鸞は、「行」を否定した。それは阿弥陀仏がはからつてくれることだとした。だから、あるのは最初から「証」のみだ。

ここに至つて、やつと庶民にも救いが訪れるのである。

親鸞の師である法然の思想には、まだ念仏を因とし、往生を果とする「行↓証」のイメージが残存する。親鸞はそれを突き抜け、「証」で屹立する地平を切り開いた。

そこは、万人に対して平等に阿弥陀仏の慈悲が施される理想の地平だ。行もなにもいらぬ。だれもが阿弥陀仏の本願によつてすでに救われているのだ。だから、人々は阿弥陀仏に報恩感謝の念仏をすればいいし、阿弥陀仏に対してなにかを願う必要も期待する必要もない。すでにすべては阿弥陀仏の本願によつて満たされている。このうちは、人々は阿弥陀仏が自分に期待してい

ることを察知し、行動するだけだ。往相が満たされたのだから、還相のプロセスを歩めばよいのである。

## 親鸞とV・E・フランク

阿弥陀仏の本願のもとに、すべての存在は肯定されている。この全肯定の理想の世界に至るためには、徹底した自我の否定が必須である。

その境地を、『夜と霧』（みすず書房）を書いたV・E・フランクに見てみたい。心理学者だったフランクは、ユダヤ人であるという理由だけで、第二次世界大戦中、ナチスドイツの手によってアウシュビッツの収容所に送られた。

そこでは、収容者たちは徹底して自我を否定される。存在自体を否定されるのである。その地から奇跡的に生還したフランクは、限界状況における人間の姿を学者の良心にかけて冷静に観察し、「強制収容所における「心理学者の体験」という文章にまとめた。これが名高い『夜と霧』である。

フランクはその極限状況の中で、ある種の回<sup>かしん</sup>心とでもいうべき体験をする。それは、「自分が人生になにを期待するかではなく、人生が自分になにを期待しているか——という言葉によって象徴される。この回心的思考の転換により、彼は悲惨極まる状況を乗り越えるのである。

フランクルは、このとき絶対者と対峙したのではないか。彼の言葉は、絶対者と向き合う人間のあるべき姿を示しているような気がする。

試みに、彼の言葉の「人生」を「阿弥陀仏」に代えてみよう。「自分が阿弥陀仏にないを期待するのではなく、阿弥陀仏が自分にないを期待しているか」——となる。阿弥陀仏に対して自分の功德や往生を期待するのではなく、阿弥陀仏が自分に対して期待していることを考えて生きていけばいいのだ。そこに、親鸞の思想と相通じるフランクルの境地を見ることができるとはいか。

ナチスはなぜ言語に絶するような残虐行為をなし得たのか。戦争前は優しかったといわれる多くの人々が、戦中、ヒトラーのもとではサディストとなり、虐殺行為に走ったという。親鸞は、この問いにも答えを用意していた。

「……なにごとにもころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがころのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」と、仰せの候ひしかば……。『歎異抄』十三」

どんなことでも決意したことはできるといふなら、往生のために千人を殺せといわれれば殺す

だろう。だがひとりも殺せないのは、業縁がないからだ。自分の心がよいから殺さないのではない。また、害すまいと思っても、（業縁があれば）百人、千人を殺すことだってある。

それが人間という存在だと親鸞は言っている。私たちの中には、善人と悪人が同居しているのだ。だが、私たちはその中の善人だけを自分と見たがる。その思い込みは我によつて起こり、百人、千人を殺すかもしれない自分を悟りすましたように装う。それでは人間の本質は隠蔽おぼへされるしかない。

親鸞は、「罪悪深重」「煩惱熾盛」と自らに言い聞かせ、その欺瞞ぎまんを振り払う。そこにこそ人間のですべてが開示され、先述のような愚行に対する本質的な反省も生まれるのであろう。

## おわりに

正直に言つて、親鸞聖人のことを文章に書くのは恐かつた。あまりにも大きな思想家だと思ふからだ。

しかし、心のどこかに、書いてみたいという気持ちも間違いなくあつた。それはうぬぼれた気持ちではなく、書くことによつて自分自身が少しでも親鸞聖人に対する理解を深めてみたい、という思いだつた。

親鸞聖人の思想は深い。その体験にもものぞき得ないような深淵が横たわっているような気がする。人の心の真実を突いてやまない言葉、鋭利な刃物のような逆説的な言説は、どこから出てくるのだろうかと思う。

それを自分で言語化するのとはとても難しいのだが、私なりに挑戦してみた。そして、私と同じような思いを持つ人たちに表現を届けることができれば意味があると思つて筆をとつた次第である。



地人館 E-books デモ版

\*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

---

## 田中治郎 (たなか じろう)

---

1946 (昭和 21) 年 宮城県生まれ

文筆家。日本ペンクラブ会員

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。

[主な著書] 『世界の地獄と極楽がわかる本』『折れない心をつくる名僧の言葉』(PHP 研究所)、『よくわかる仏教入門』『コミュニケーション力がUPするブツダの言葉』(佼成出版社)、『面白いほどよくわかる日本の宗教』『面白いほどよくわかる日本の神様』『面白いほどよくわかる浄土真宗』『仏教のことが面白いほどよくわかる本』『釈迦の教えが面白いほどよくわかる本』(中経出版)、『生き方を学ぶ仏教入門』『禅の言葉 100』『歎異抄◆原文と現代語訳』(地人館 E-books) ほか多数。

---

### しんらんにようもん 親鸞入門

---

著者 たなか じろう  
田中治郎

初版発行 2021 年 11 月 9 日

発行 ちじんかん  
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2021 Jiro Tanaka